

ツキ板

ツキ板とは、木を薄く削り出した板（厚さ約 0.2～3mm）のことで、主に高級家具や建築内装建材の表面材として利用されています。

かつては手鉋（かんな）などで木を突く方法で作られたことから、現在でもツキ板と呼ばれています。

我が国のツキ板の歴史は古く、法隆寺献納宝物や正倉院宝物の中にツキ板を使用した象嵌（ぞうがん）の手箱などが残っています。

大正初期、家具職人は鏡台、針箱、長火鉢などの家具の素材面として黒柿、桑、タモなどの厚さ3mm程度のツキ板を化粧張りしていました。当時の家具職人は自分でツキ板を作り自分で化粧張りしたもので、これができないと一人前の家具職人とは言えませんでした。

大正3年(1914)に、静岡市出身の家具業者であった賤機（しずはた）清太郎が、東京市下谷区（現東京都台東区）入谷の小野照崎神社近くに移り住み、家具の鏡台、針箱等を作り、その家具の表面に自分で作ったツキ板を化粧張りしていました。この家具が好評を得て、ついには同業者から「ツキ板をわけてくれないか」と声がかかり、自家製家具のみに生産していたツキ板を化粧張り用として販売するようになりました。当時は鏡台の最も大きなものでも天板が60センチ×30センチ位であったので、ツキ板も同様の大きさだったと思われます。しかし、手鉋で突いていたため量産が出来ず、賤機はなんとか機械化して量産を図ろうとします。こうして、大正8年(1919)、木製の手動式スライサーが完成したのです。（写真参照）

その後大正12年(1923)9月1日関東大震災が起き、その復興とともに家具の需要が急増し、これに伴ってツキ板の需要も増大しました。大正13年(1924)、静岡の服部機械製作所が我が国初の鋳鉄製電動式製造機を作り、ツキ板の量産が可能となったことから、静岡が現在のツキ板の発祥地として全国に知られるようになりました。

第二次世界大戦後、接着剤の改良と生産技術の向上により住宅資材はもとより、家具、船舶、楽器、キャビネットなどに需要が拡大し、特に静岡では家具業界の発展に大きく貢献しました。

資料 8